Osaka University Knowledge Archive

Title	職業的実践による社会意識の形成過程 ： 労働空間の社会意識論
Author(s)	田靡, 裕祐
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59328
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【24】

氏　　名	田　蓡　裕　祐（たなびき　ゆうすけ）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　25315　号
学位授与年月日	平成24年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	**職業的実践による社会意識の形成過程　—労働空間の社会意識論—**
論文審査委員	（主査） 准教授　吉川　　徹 （副査） 教　授　川端　　亮　　教　授　ノース，スコット

論文内容の要旨

本研究では，労働空間の社会意識論を標榜し，労働概念を基軸とした社会意識の計量分析を行った．第1章ではまず，社会意識論の3類型を示し，本研究が第3の類型に属するもの，すなわち特定の社会的領域に限定された心理的諸構造や諸過程を研究対象とするものではなく，社会意識の多元的な総体を，もっとも広範に，あるいは効率的に説明することのできる説明要因についての探求であることを述べた．次に，労働概念を分析の基軸として採用するにあたり，従来用いられてきた職業的地位概念について，現代の労働の実態に即して再検討した．そして，労働の個人化の進行によって，職業階層構造を区分している地位内の多様性と，地位間の同質性が高まるため，個人の労働実態により肉薄した新しい労働概念，すなわち職業的実践概念が必要となることを指摘した．そのうえで，課題を設定した．第1の課題は，社会意識の共通の説明図式としての適用を目的とした労働空間の概念を，諸個人の職業的地位や職業的実践によって構成し，その現代社会における特質について記述的に明らかにすることである．これは簡単に言えば，地位--実践関係を検討するということであった．第2の課題は，労働空間におけるさまざまな社会意識の形成過程を計量的に明らかにし，社会意識に対する労働空間の作用のパターンを析出・整理することである．これは，地位--意識関係と実践--意識関係を，労働空間という分析枠組みのもとで，体系的に整理するということであった．

第2章では，職業的地位および職業的実践の概念規定を明確にし，指標の提示と，必要に応じた測定モデルの提示を行った．職業的地位とは，職業の異質性によってもたらされる社会的不平等に基づく人々の序列づけであり，垂直的・階層的な序列関係を仮定した概念である．その一方で職業的実践とは，職業的地位に就いた個々人における，仕事の具体的な遂行のあり方と定義される．職業的実践概念の特徴として，職業的地位概念においては平均化されるか捨象されてしまう個々人の労働のディテールを捉えることのできる「解像度」の高さと，企業や労働者の自由な判断や裁量による変化の可能性の高さを指摘した．職業的実践の指標としては，複雑性，自律性，反復性，向人間性を示した．複雑性，自律性については，パネルデータを用いた確証的因子分析によって，安定的で妥当性の高い尺度が得られることを確認した．

続く第3章では，本研究の第1の課題である労働空間の内部，すなわち地位--実践関係について検討を加えた．労働空間とは，職業的地位の垂直的な階層的序列を基礎構造として，個々人の職業的実践が，職業的地位との一定の対応関係を保持しながら分布している構造であると定義した．その関係性は，職業的実践によって異なる．複雑性と反復性は，職業的地位との関連の強い垂直的・階層的な職業的実践であり，自律性と向人間性は，職業的地位との関連が希薄な横断的・普遍的な職業的実践であることが示された．そして，労働空間におけるこのような違いが，社会意識への作用のあり方を方向付けると論じた．

第4章では，仕事の複雑性の簡易的な尺度を提案した．これは，複雑性の実測値を予測する回帰式を他のデータセットに適用することによって，個人属性や階層的指標から，複雑性スコアを算出するというものである．この簡易版の尺度は，他の方法で算出された複雑性スコアとも高い相関を持っており，その妥当性の高さが示された．この尺度を用いて，多様な社会意識項目に対する探索的な分析を加えた．その結果，複雑性スコアは，階層帰属意識や暮らし向き，生活満足度，格差肯定意識といった社会階層に関わる意識に対して，職業威信スコアには還元されない独自の効果を持っていることが明らかとなった．さらに，組織参加活動や文化活動，消費行動のような項目に対しても，複雑性スコアは直接的な効果を示した．

第5章では，階層帰属意識と権威主義的態度をとりあげ，これまでに検討がなされてこなかった同一個人内での意識変化の要因分析を行った．その結果，権威主義的態度に対しては，職業的地位ではなく職業的実践の効果がみられた．この意識は，個人的な価値意識やパーソナリティの水準にあるため，より個人的な条件である職業的実践の社会化効果を受けると考えられる．階層帰属意識に対しては，職業的実践ではなく職業的地位の効果が顕著であった．この意識は，社会階層における個人の地位評価であるため，職業の地位的な側面は判断基準となっても，具体的な労働の中身は問題とならないからである．

第6章では，職業コミットメントと自尊心をとりあげ，正規雇用／非正規雇用という分断線が両意識に及ぼす影響の複雑な機制について明らかにした．その結果，職業コミットメントに対しては，職業的地位と職業的実践の正の主効果が認められたが，自尊心に対しては，地位と実践の交互作用効果のみが示された．すなわち，非正規雇用という低い職業的地位において，高い自律性という職業的実践が付与された場合，それは労働者の自尊心を損ねる方向に作用してしまう．なぜならば，同じような仕事をより恵まれた地位で遂行している正規雇用労働者と自らを比較することによって，深層における心理的疎外が助長されてしまうからである．

第7章では，思いやり行動と組織参加活動という向社会的行動をとりあげ，仕事の向人間性がどのように作用しているのかについて分析を加えた．その結果，思いやり行動については，向人間性が職業的地位の効果の一部を媒介していることが分かった．仕事の向人間性は，労働者が置かれている職業的地位を与件としながらも，市民社会や公共性の基盤となるような人々の心性・行動を促進するための重要な手がかりとして存在している．

最後の第8章において，5章から7章までの計量分析の結果を，職業的地位と職業的実践からなる労働空間との関連のパターンとして体系的に整理した．そして，第1に，研究の対象

としている社会意識が，労働空間の作用のパターンのうちどれに該当するのかということが，その社会意識の可変性について予測をもたらすということ，第2に，社会意識の重層性に対して，職業的実践は表層に，職業的地位は深層に作用しているという可能性を指摘した．

論文審査の結果の要旨

本研究は、労働空間と社会意識の関係を理論的な考察と計量分析によって明らかにしたものである。はじめに社会意識論という研究分野をレビューして、社会意識の多元的で広範な総体を効率的に説明するという方向性が打ち出される。そこで鍵となる概念として申請者は、近年の雇用の流動化をはじめとする労働環境の変化に注目し、労働空間という新たな分析の枠組みを導き出している。これは、マルクス以来用いられてきた職業的地位という視点が、社会意識を説明する際に形骸化・無効化しているとする先行研究を受けて、現代日本の労働環境を捉え直そうとする意欲的な試みである。

申請者は本論文において、職業的実践という独自概念を提唱する。これは職業的地位とは別次元のものであり、一人ひとりの仕事の具体的な遂行のあり方を意味する。その指標としては、アメリカの職業社会学者メルビン・コーンらの「職業と人間」研究を参考にしつつも、独自の視座を加えた、仕事の自律性と向人間性が用いられている。職業的実践という概念を組み入れることにより、従来は垂直的・階層的な序列関係だとみられてきた労働について、立体的な枠組みで高い「解像度」をもって捉えることが可能になったという。

理論的な視座を明らかにした後、続く章では、職業的実践が社会調査データを用いて測定され、この独自の指標を、職業的地位の指標と同時に投入して、社会意識の形成過程において職業空間がもつ意味の大きさが検討される。その結果、社会階層の構造に対する主観的評価や組織参加、文化活動、消費に対しては、仕事の複雑性スコアが独自の効果をもっていること、権威主義的態度に対しては、職業的地位ではなく職業的実践からの形成効果が検出されること、非正規雇用で自律性が高い条件に置かれた労働者が、有意に自尊心を低下させる傾向があること、向人間性の高い働き方が、思いやり行動を高める効果をもつことなどが明らかになった。

このような計量的実践により申請者は、現代日本社会において職業的地位と職業的実践が構成する労働空間の存在を明らかにし、この労働空間が、現代人の社会意識の多様な局面に対して、さまざまな形成効果をもっていることを示している。

以上のとおり、申請者はこの分野の研究動向を独自の視点で整理し、緻密な計量分析を積み重ねて、既存の理論に修正を加えることに成功した。その論理は明瞭であり、どこまでの事実を明らかにしたのかということについて、過不足なく正確に記述されている。これらを総合的にみるとき、本論文の完成度と学問的価値は高い。

以上により、本論文は博士（人間科学）の学位論文として十分な水準にあるものと認める。